

# タイとカンボジアの国境紛争

山下明博

(安田女子大学現代ビジネス学科教授)

## はじめに

本論文は、タイとカンボジアの国境紛争について、スモーリーのタイにおける言語階層と、筆者が東北タイで実施したアンケート調査結果を用いて検討することを目的とする。アンケート調査は、トヨタ財団の助成（2000年度研究助成「東北タイのラオ人の言語認識と帰属意識：民族紛争不在の事例研究」、代表：山下明博）を得て、2001年3月と9月に、東北タイのブリラム県、コーンケン県、ナコンラチャシマ県、チャイヤプーン県で行った2375名に対する調査のことである（山下 2003: 46-48）。

## 1 タイの少数民族北クメール人

### (1) タイの民族と言語

タイ（Thailand）は、東南アジアに位置する立憲君主国である。タイの国民は、タイ（Thai）人、ラオ（Lao）人、ユアン（Yuan）人といったタイ系民族や、クメール（Khmer）人、モン（Mon）人、などの少数民族、カレン（Karen）人、メオ（Meo）人、アカ（Akha）人といった山岳少数民族、そして、華人などから構成される。

このように、タイは多民族国家であり、同時に多言語国家でもある。タイでは、標準タイ語が全国に普及している。標準タイ語は、現在の中央タイに分布するタイ人が母語とするタイ克蘭（Thaiklang）語を基に作られており、タイの国語とされる言語である。学校教育の場においては、標準タイ語を使った教

育が行われ、テレビ、ラジオ、新聞といったマスメディアも、標準タイ語を使用している。タイにおける言語階層の中では、標準タイ語は、その最上位を占めている（山下 2002: 223-225）。

そして、国内の各地域では、タイクラン語、カムムアン（Kammüang）語、ラオ（Lao）語<sup>1)</sup>、パクタイ（Paktay）語という4つの地域言語が使用されている。これらの地域言語は、すべてタイ（Tai）諸語に分類され、言語階層の中で、標準タイ語の直下に位置づけられる。

図1に、タイの地域言語分布を示す。

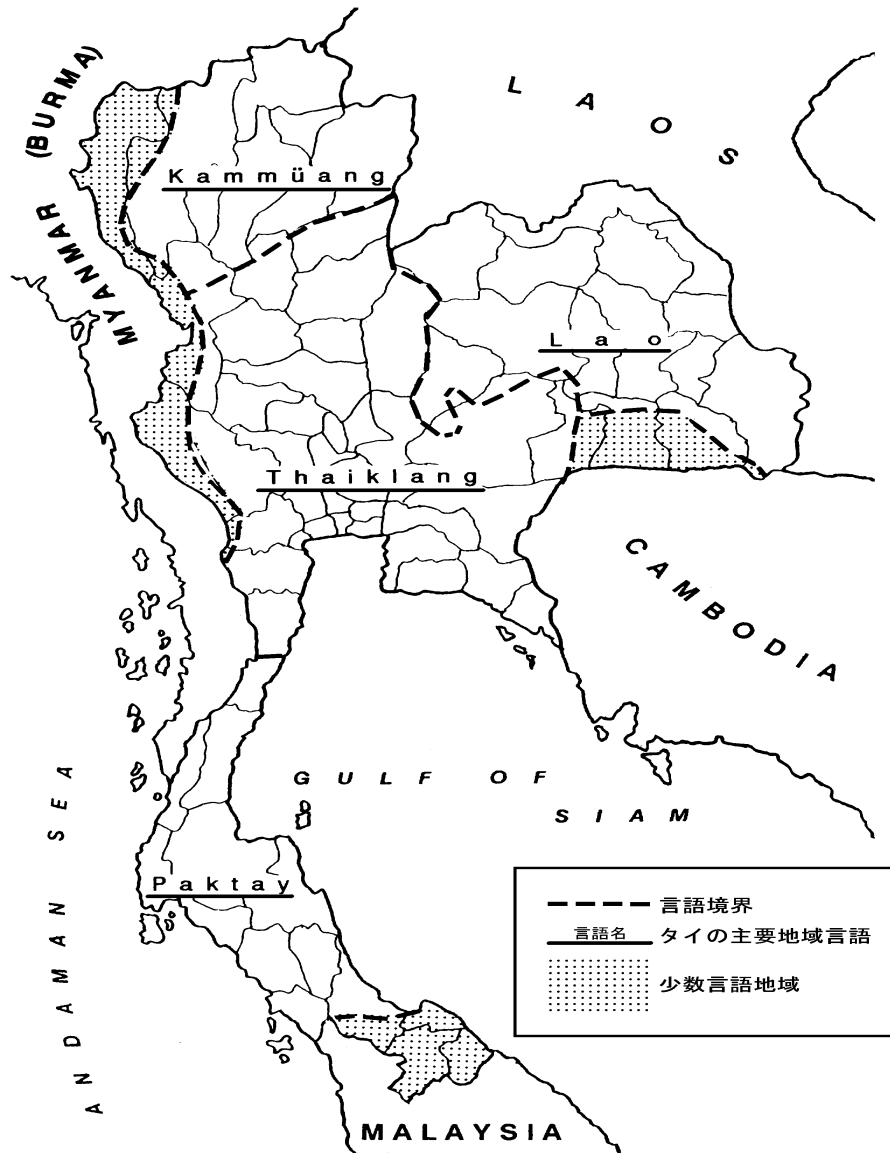


図1 タイの主要言語分布  
出所：Smalley (1994), 68より作成

さらに、4つの地域言語の下位の階層に、北クメール（Northern Khmer）語、タイヤイ（Tai Yai）語といった周辺的地域言語、そして、さらに下位の階層に、中国語、山岳少数民族言語などが位置づけられる（Smalley 1994, 69）。

図2に、タイにおける言語の階層を示す。

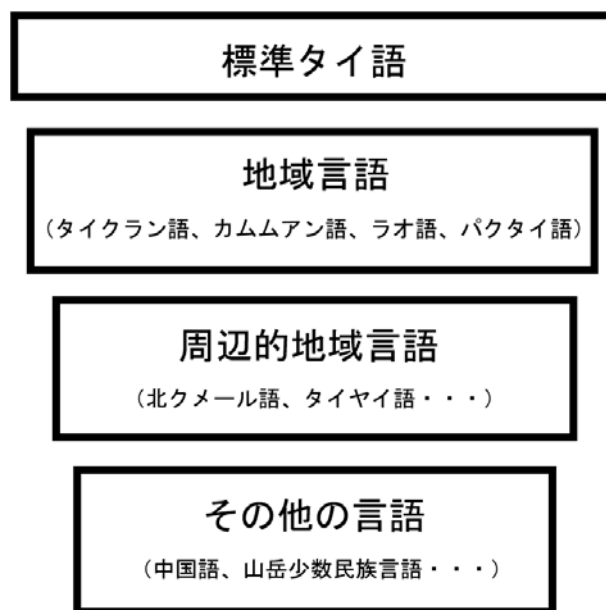


図2 タイにおける言語の階層

出所：Smalley(1994), 69より作成

## (2) タイ国内の北クメール人と言語

ここでは、本論文で議論の対象とする、タイ国内の北クメール人とその言語について述べる。

クメール人は、その大部分がカンボジア、残りがタイ東北部およびベトナム南部に住んでおり、カンボジアの主要民族である。このうち、タイ国内に住むクメール人は、北クメール人と呼ばれ、人口は約110万人とされる（Smalley 1989, 365-71）。彼らは、タイとカンボジアの国境に位置するタイ東北部の3県<sup>2)</sup>に集中して居住している。

北クメール人の使用する言語は、北クメール語であり、これは、モン・クメ

ール語族のひとつである。北クメール語と、カンボジアの中央部で使用されているクメール語とは、相互に理解可能な言語であるが、2つの地域で別々に使用されていたため、現在では、語彙や文法上において、微妙な相違点が存在する。

タイ国内では、標準タイ語が言語階層の最上位に位置しており、その下位に、東北タイの地域言語としてラオ語が存在するため、北クメール語は、さらにその下位の周辺的地域言語に位置付けられている。

図3に、スモーリーが推定したタイ東北部の言語境界と、山下の調査に基づく言語境界を示す。

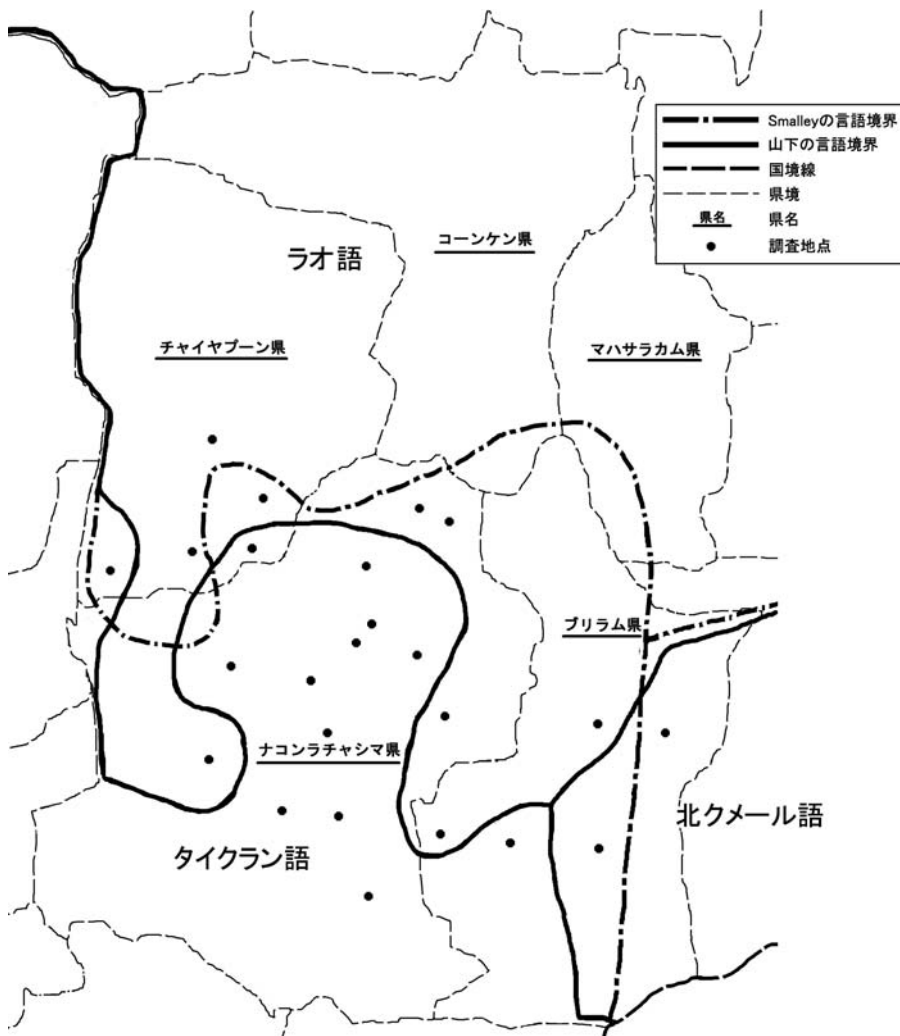


図3 調査地点と言語境界

出所：筆者作成

スモーリーは、タイ国内のどの地域で、どのような言語が使用されているかを研究した。その中で、タイ東北部においては、標準タイ語のもととなったタイクラン語が話されている地域が、ゆっくりと着実に、ブリラム県を越えて、主に北クメール語を吸収しながら東方へ広がっていると推定した (Smalley 1989, 112)。しかし、2000年に山下が実施したアンケート調査において、ブリラム県内では、タイクラン語使用地域がより小さく、ラオ語使用地域と北クメール語使用地域がより大きいことが判明した (山下 2002, 226-227)。

この図より、ブリラム県におけるタイクラン語使用地域の面積を比較すると、スモーリーの推定に比べ、山下の調査結果の約1/3に過ぎないことが読み取れる。これは、タイクラン語が、スモーリーが考えているほど、北クメール語使用地域に浸透していないことを意味し、スモーリーの推定を否定する結果である。

タイ東北部の北クメール人は、タイという国家の中においては少数民族の位置付けである。そのため、母語である北クメール語が、学校教育で教えられることはない。彼らは、公的な場所では、国語として言語階層の最上位にある標準タイ語、または、地域言語としてその下の地位にあるラオ語を使用し、家庭内や友人間といった私的な場所では、より低位の周辺的地域言語に位付けられた、母語の北クメール語を使用するという状況にある。

### (3) クメール語とタイ語の関係

ここでは、現在のタイ (Thai) 語と、クメール語の関係について述べる。

言語学上は、タイ (Thai) 語はタイ諸語、クメール語はオーストロアジア語族中のモン・クメール諸語に属す、互いに別系統の言語とされている。タイ語には中国語のように声調の区別があり、クメール語にはそれがない等、相違点は多い。しかし、タイ語とクメール語は共通語彙が多く、クメール語からの借用語は、タイ語語彙の20~30%にのぼると言われている。逆に、タイ語からクメール語への借用語も存在する (高橋 2003, 65)。

言語間の相互理解度は、タイクラン語と北クメール語の、タイ国内における

言語階層の位置の違いにより違いがある。

2000年に言語認識に関するアンケート調査を行った際、標準タイ語を母語とする学生は、ブリラム県に住む北クメール語話者の話を聞いたとき全く理解ができなかったと述べた。他方、北クメール語を母語とする学生は、ブリラム県に住む北クメール語話者の老人に対する聞き取りを通じて、老人は小学校を出ておらず標準タイ語を学校で学んだことはないため、標準タイ語を話すことはできないが、理解することはできると述べた。

これは、言語階層上位の言語を母語とするタイ人は、言語階層が相対的に下位の言語をまったく理解することができないと答え、言語階層下位の言語を母語とする北クメール人は、言語階層が相対的に上位の言語を理解できると答えたことを意味し、言語の相互理解度は、標準タイ語と北クメール語の、タイ国内における言語階層の位置の違いに拠ると考えられる。

同様の事例は、標準タイ語とラオ語についても存在する。

タイ東北部には、ラオ語を母語とするラオ人が、約1500万人居住している。ラオ語は、前述のように、タイ国内の言語階層においては4つの地域言語のうちの一つという位置付けであり、国語である標準タイ語は、タイ国内の言語階層において最上位を占める。

筆者は、タイ東北部のナコンパノムに居住し、ラオ語を母語とする学生を連れて、標準タイ語を母語とするタイ人が多く住む首都バンコクに研修旅行に行き、差別的な行動に憤った教官の話を聞くことができた。彼は、宿泊先の校長が、歓迎の挨拶の中で、学生たちのことを、訳の分からない言葉（ラオ語）を喋る田舎者という表現をしたと述べている。

林（1990: 409）によると、ラオ人の住むドーンデン村の30代のラオ人はほぼタイ語とラオ語の二言語使用能力をもっており、50代のラオ人でもタイ語新聞を読むことだけはできるが、標準タイ語教育を受け始めた、さらに高齢の第1世代は、タイ語は理解しても読み書きはできないという。

これも、言語階層上位の言語を母語とするタイ人は、言語階層が相対的に下位の言語をまったく理解することができないと答え、言語階層下位の言語を母語とするラオ人は、言語階層が相対的に上位の言語を理解できると答えたことを意味し、言語の相互理解度は、標準タイ語とラオ語の、タイ国内

における言語階層の位置の違いに拠ると考えられる。

そして、タイ人は、タイ国内において、少数民族である北クメール人やラオ人を軽蔑する傾向がある。タイ東北部のうち、南部の研究を行うソラチェート・ウォラカムウィチャイは、次のように述べた（シーサワット 1991, 10）。

文明をもたらし、文明を創造した民族は、大抵蔑視されている。蔑視する側の人たちは、その文化を受け入れた人たちである。

タイ人はインド人を罵る。「蛇とインド人に会えば、まずインド人を蹴散らせ」と。しかし、タイ人はインド人であるバラモンや仏陀を信仰する。

タイ人はクメール人を罵る。タイの書き言葉、喋り言葉にはクメール語がいっぱい入っている。文化も含めてである。

タイ人は東北のラオ人を軽蔑する。しかし、もとの言語、文化はほとんどすべてがアユタヤ以来、ラオスと東北タイから入ってきたものである。

筆者は、タイ人のクメール人に対する蔑視感情が、国内においては、タイクラン語と北クメール語の言語間の相互理解度の違いに現れていると考える。そして、この蔑視感情が、国外においては、後述するタイとカンボジア間の国境紛争という形で具現化しているのではないかと考える。

#### （４）タイとカンボジアの国境決定

タイとカンボジアとの間の国境紛争は、すでに 100 年以上も続いている。そして、その発端は、19 世紀にイギリス・フランスが本格的に東南アジアに進出をはじめた時点に遡る。

図 4 は、1867 年と 1907 年に、タイがフランスに割譲した地域を示す。



図4 フランスに割譲した地域

出所：吉川(1993), 159より作成

数字が入っている2つの地域が、現在のカンボジアの国土のうち、1867年および1907年にタイがフランスに割譲した地域である。フランスは、1862年にベトナムのサイゴンおよび周辺3省を占領したのを皮切りに、インドシナ植民地の建設を行った。そして、ベトナムに代わってカンボジアの宗主権を引きつぎ、1865年には、カンボジアをフランスの保護領とした。1867年にフランスは、プノンペンを中心とするカンボジア中部をタイに割譲させた。その後、イギリスとフランスが、東南アジア大陸部で植民地獲得による緊張を避けるために、1896年、タイとその周辺を両帝国主義国の緩衝国家とするという英仏協定を締結し、タイは独立国としての領域を保証されることになった。しかし、フランスは、1907年、フランスの保護民となったアジア系移民に対する裁判権を獲得する代償として、タイと国境を接するカンボジア北部をタイに割譲させた。ここには、アンコールワット遺跡も含まれていた。これにより、タイは独立の維持と条約改正のために、最大版図の半分に当たる約456000km<sup>2</sup>を失い、現在の版図となった(吉川1993, 160)。そして、この時点で、タイとカンボジアの現在の国境



が、ダンレック (Dangrek) 山脈の分水嶺に決定された。

以上のような状況から、1907年までは、現在のタイ東北部とカンボジア北部は、同じタイ国内であり、それ以前は、人々の往来も盛んであったため、図4の中で、細い線で囲んだ、タイとカンボジアの国境に位置するタイ東北部のブリラム県、スリン県、シーサケット県に、約110万人の北クメール人が居住することになったのである。

そのため、タイ人には、フランスによって領土を侵食されてしまったが、もともとカンボジアはタイの支配していた領土であったという思いが存在する。それが明らかになった例が、2003年に発生した、「アンコール・ワット (Angkor Wat) 騒動」である。

これは、2003年1月、タイの有名な女優でカンボジアでも人気があるスワナン・コンジン (Swanan konjin) が、「アンコール・ワットはタイのもの」、「私をカンボジアに呼びたいければアンコール・ワットをタイに差し出すべき」という趣旨の発言をしたと報道され、カンボジアのフン・セン (Hun Sen) 首相が激怒して、カンボジア国内でテレビ放映されていたドラマを中止したことに端を発する。その後、プノンペンにあるタイ大使館前での抗議デモの一部が暴徒化して大使館を襲撃し、放火と略奪に至り、さらに、タイ系企業への略奪行為、タイ・カンボジア間の外交関係の実質的な途絶、タイの首都バンコクでの抗議活動へと発展して行った。

結局、女優のそのような発言はデマであったとされるが、タイ人のカンボジアに対する思いの一端が垣間見えた瞬間であった。そのような、タイ人のクメール人に対する優越感や蔑視感情が国外に向けられたのが、アンコール・ワット騒動であり、次章で述べる、国境紛争である。

## 2 タイとカンボジアの国境紛争

タイとカンボジアは、国境をめぐる紛争を抱えている。それは、プレアビヒア寺院遺跡 (Preah Vihear Temple) の帰属をめぐる紛争である。

## (1) プレアビヒア寺院の歴史と帰属

クメール人は、現在のカンボジアにおいて最多数を占める民族であることはすでに述べた。彼らは、9世紀にアンコール王朝を興し、13世紀のジャヤヴァルマン7世の時代には、カンボジアを中心に、現在のタイ東北部、現在のラオス南部までを統治下に置いた。そして、これらの地域に多くのクメール様式の建造物を建立し、それらは遺跡として残存している。その代表的な例が、カンボジアのアンコールワット遺跡であり、タイのピマーイ遺跡（Prasat Phimai）である。

クメール人は、13世紀頃まで、ヒンドゥー教と大乘仏教を信仰しており、クメール遺跡の壁面にも、ヒンドゥー教や大乘仏教を題材にした彫刻が施されている。

タイとカンボジアの間で、その帰属をめぐる紛争となっているプレアビヒア寺院遺跡も、9世紀から約300年かけて建立された、クメール様式のヒンドゥー寺院遺跡の一つである。全長900mにも及ぶこの遺跡は、ダンレック山脈の断崖絶壁の上に建てられている。

タイとカンボジアは、この寺院一帯の領有権を長年争ってきた歴史がある。プレアビヒア寺院遺跡を建立したのは、クメール人である。しかし、1431年、タイのアユタヤ王朝がカンボジアのアンコール王朝を攻略し、それ以降、プレアビヒア寺院遺跡はタイの領土となった。

一方、カンボジアは、19世紀以降フランスのインドシナ植民地に組み込まれ、フランスの保護国となった。そして、その後、タイがカンボジアに有していた領土をフランスに割譲したのは、前章で述べたとおりである。このとき、タイとフランスの国境画定に関する条約では、両国間の国境は分水嶺に従うものとされ、さらに、両国間に設置される合同委員会により国境の画定が行われると規定された。

この条約に基づいて設置されたフランス=シム合同国境画定委員会<sup>3)</sup>では、タイの要請に基づき、フランス当局が測量地図を作成し、1908年にパリでこれを公刊するとともに、タイ側に提示した。この地図では、プレアビヒア寺院がカンボジアに位置することになっていた。しかし、タイが1934～35年に実施し

た調査により、国境線と分水嶺の不一致を発見した。そして、第二次世界大戦後、タイはプレアビヒア寺院に警備兵を派遣した。それは、カンボジアがフランスから独立した1953年にも続いていた。そのため、カンボジアは、警備兵をプレアビヒア寺院に派遣することができなかった。

1958年には、タイのバンコックにおいて、両国の領土問題会議が開催されたが、交渉は決裂し、1959年、カンボジアは、「プレアビヒア寺院およびその周辺地域に対する領有権の確認等」を求めて、国際司法裁判所に提訴した。

1962年に出された国際司法裁判所の判決は、「プレアビヒア寺院がカンボジアの主権下の領土に位置することを認める。」というものであった。

タイは、この判決に不満であったが、判決を履行すべき国際連合加盟国としての義務を尊重するという立場から、国連事務総長に対し、現存のあるいは将来援用可能となる全ての法的手続きに訴えて、プレアビヒア寺院の回復を達成するという権利に関する留保を維持する意思と、判決に対する抗議を述べた通牒を通告し、1962年、判決を完全に履行したとされる（波多野・松田1999）。

## （2）プレアビヒア寺院の世界遺産登録と国境紛争

ダンレック山脈の断崖絶壁の上に建てられたプレアビヒア寺院遺跡は、遺跡から眼下に広大なカンボジアの平原を見渡すことができ、観光資源としての価値も高い。しかし、1975年から始まったカンボジア内戦の際に、この地域はポルポト派の勢力圏にあり、ポルポト派はこの地域に軍事的要塞を構築し、無数の地雷がこの地域に埋められた。タイとカンボジアの国境に位置するプレアビヒア寺院遺跡は、両国の関係が緊張すると、タイから遺跡に通じるゲートが閉鎖されるなど、観光客が容易に訪れることが困難な遺跡であった。

その後、1998年には、タイから遺跡に通じるゲートが開放され、遺跡を訪れる観光客も増加してきた。

そこで、カンボジアは2008年、プレアビヒア寺院遺跡を世界遺産に登録しよう、国連教育科学文化機関（ユネスコ、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization、UNESCO）の世界遺産委員会に申請した。そして、2008

年7月8日、プレアビヒア寺院（Preah Vihear Temple）が、世界遺産リストに登録されることが決定した。これは、カンボジアでは、1992年に世界遺産に登録されたアンコールワット遺跡に続き、2つ目の世界遺産である。

### （3）プレアビヒア寺院帰属に関する問題

プレアビヒア寺院に関する紛争に関しては、プレアビヒア寺院の立地がもたらす問題が存在する。

図5は、プレアビヒア寺院遺跡周辺の地形図である。白線は、フランスが1908年に測量して作成した地図に基づく国境であり、白線の北側がタイ、南側がカンボジアである。また、黒い丸は、プレアビヒア寺院遺跡の位置である。

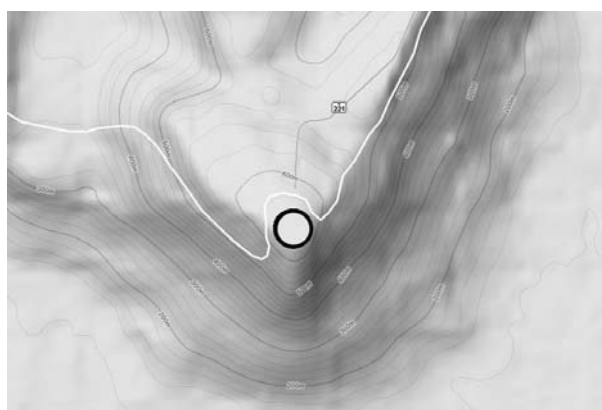


図5 プレアビヒア寺院付近地形図

出所：筆者作成

プレアビヒア寺院の南側は、断崖絶壁になっている。そのため、カンボジア側から、プレアビヒア寺院に入ることはできない。プレアビヒア寺院の入り口に入るには、北側にあるタイ国道221号線沿いの山のふもとから上るしかないという問題がある。この図からは、フランス当局が1908年に公刊した地図が、恣意的に国境線を曲げ、プレアビヒアを、南部のカンボジア領に組み入れた様子が伺える。

#### (4) カンボジア北部割譲以前の寺院の所属

ここで、タイがカンボジア北部をフランスに割譲する 1907 年以前に、プレアビヒア寺院の所属について、当時の人々がどのように考えていたのかについて考察する。

エティーネ (Etienne Aymoniers) は、1901 年に出版した「Le Cambodge」の「Les Provinces Siamois」の中で、カンボジアとタイに点在する多くのクメール遺跡を取り上げ、遺跡の形状や碑文についての記述を残している。これは、カンボジア北部がまだタイの領土であった時期である。その中に、プレアビヒア寺院遺跡の記述があり、「ムーン川とダンレック山脈の間」の章で取り上げている。ムーン川は、現在のタイ東北部を横に流れる河川である。また、地図でも、「ムーン川とダンレック山脈の間」という地図の中にプレアビヒア寺院遺跡が記載されている。図 6 に、その地図を示す。



図 6 ムーン川とダンレック山脈の間

出典：Aymonier (1901), Map5 より作成

このことから、彼は、プレアビヒア寺院遺跡を、現在のタイ領内の遺跡と考えたことが分かる。また、彼に遺跡の所在を教え、案内したタイ人もまた、

プリアビヒア寺院遺跡が現在のタイ領内にある遺跡だと考えていたからこそ、エティーネも、このような地図を作成し、「ムーン川とダンレック山脈の間」の章でプリアビヒア寺院遺跡を取り上げたと考えられる。

## (5) タイとカンボジアの国境紛争の拡大

2008年11月現在、国境紛争は継続している。以下、AFP通信の記事<sup>4)</sup>を中心に、プリアビヒア寺院遺跡をめぐる紛争が拡大していった状況の概略を、時系列に従って示す。

カンボジアが2008年、プリアビヒア寺院遺跡を世界遺産に登録するよう、ユネスコの世界遺産委員会に申請し、2008年7月8日、ユネスコの世界遺産委員会が、プリアビヒア寺院遺跡を、世界遺産に登録することを発表したことは前述の通りである。

タイは、この寺院のカンボジア側には絶壁が広がり、寺院の入口に至るには、タイ側の山のふもとから上るしかないという地形的な問題から、カンボジアが世界遺産登録に単独で申請することに同意していなかった。しかし、2008年6月にタイのサマック・ストラウェート (Samak Sundaravej) 政権のノパドン・パタマ (Noppadon Pattama) 外相が、カンボジア政府による登録申請に合意したことで、いったんこの問題は解決したと思われた。しかし、タイ国内の政治団体や市民団体がこの合意に激しく反発した。そして、2008年7月8日、タイの憲法裁判所は、タイとの国境問題を抱える地域であるカンボジアのプリアビヒア寺院の世界遺産登録に、ノパドン外相が議会の承認を得ずに同意したことは違憲だと判断し、それを受けて、2008年7月10日、ノパドン外相は、プリアビヒア寺院の世界遺産登録をめぐる混乱の責任を取って辞任した。

2008年7月15日には、プリアビヒア寺院遺跡がカンボジアの世界遺産として登録されたことに抗議したタイ人3人が、国境の検問所を飛び越えて寺院へ行こうとし拘束された。この事件の数時間後、カンボジアは、約40人のタイ軍部隊が越境しカンボジア側に侵入したと発表したが、タイ・シーサケット県のセニ知事 (Seni Chittakasem) は、侵入は誤解であり、タイ部隊による国境侵犯

はなかったと否定した。その後、拘束された3人は全員釈放され、タイ領内に帰還した。

2008年7月16日、カンボジアは、タイ軍兵士が国境を越えてカンボジア領に侵入し、200人以上が集結していると発表した。タイは越境の事実を否定し、領内の国境パトロールを実施していると主張した。同時に、カンボジア軍もタイとの国境地帯に数百人規模の部隊を配備した。

2008年7月17日、タイ軍兵士400人以上とカンボジア軍兵士800人以上が、プリアビヒア寺院遺跡に通じる山の斜面の小さな仏塔周辺に集結した。また、17日午後、仏塔のカンボジア僧の食糧を確保するためカンボジア兵士50人ほどが仏塔施設内に入った際、両軍が2度にわたり10分間ほど銃口を向け合うなど緊張が高まった。

2008年7月20日、プリアビヒア寺院遺跡に続く坂道にある小さな仏塔の周辺に、約500人のタイ軍部隊と1000人を優に超えるカンボジア軍部隊が配備された。カンボジア政府のキュー・カナリット (Khieu Kanharith) 情報相は、この対立に注意を喚起するため国連 (UN) に書簡を送ったと発表した。

2008年7月21日、タイのブーンスラン司令官 (Boonsrang Niumpradit) は、カンボジアのティア・バン (Tea Banh) 国防相と会談したが、国境問題をめぐる両国の軍事対立に解決の糸口は見つからなかった。会談では、プリアビヒア寺院付近の領有権について、タイ、カンボジア双方が権利を放棄しなかった。ブーンスラン司令官はタイのテレビに出演し、「両国が別の地図を使っていることが問題。カンボジアはフランスの地図を使用し、タイは米国が策定した地図を使用している。そのために、合意に達するのが困難だった」と述べた。

2008年7月22日、F-16戦闘機を含む空軍の飛行機20機がウボンラチャタニ空軍基地<sup>5)</sup>に移動、プリアビヒアから60kmほどタイ内陸に入ったところに装甲車60台が配置についた。ほかにプリアビヒア以外のカンボジア・タイ国境で両国とも国境パトロールを増員、強化した。

2008年7月24日、東南アジア諸国連合 (ASEAN) 地域フォーラム (ARF) 閣僚会議がシンガポールで開幕し、タイとカンボジア間の国境をめぐる問題も協議された。国境問題について、米国のコンドリーザ・ライス (Condoleezza Rice) 国務長官は、両国が軍隊を派遣している事態に懸念を示し、タイ、カンボジア

両国に平和的な解決を求めた。

2008年7月25日、プリアビヒア寺院付近で対峙しているタイ・カンボジアの兵士は約4000人にのぼった。

2008年7月28日、カンボジアのホー・ナムホン（Hor Namhong）外相とタイのテート・ブンナー（Tej Bunnag）外相は、問題打開に向け、カンボジアのシエムレアプ（Siem Reap）で協議を行った。12時間に及ぶ協議の結果、両外相は寺院周辺から軍部隊を撤収させることを検討していくことで合意したものの、事態打開に向けた明確な解決策は示されなかった。

2008年8月14日、カンボジア軍高官は、両国の軍当局が遺跡周辺に展開している両軍の兵力を大幅に減らすことで合意したと明らかにした。また、タイ軍関係者もこの事実を認め、一部の部隊はすでに14日から撤退を開始していることを明らかにした。カンボジア軍高官は「合意された部隊の移動は、両国間の閣僚級協議が始まる18日までには完了する」と語った。その時点で、プリアビヒア寺院周辺の両国の兵士展開数は1000人以上になった。

2008年10月3日、プリアビヒア寺院付近の国境未画定地域で、両国軍の間で短時間の銃撃戦があり、カンボジア兵士1人、タイ兵士2人の計3人が負傷した。8月中旬に両国が合意した兵員の大幅削減により、配備は数十人になっていた。両国は銃撃戦の原因は相手側にあるとしてお互いを非難した。

2008年10月13日、カンボジアのフン・セン首相は、タイ軍が正午までに撤退しなければ、紛争地域でタイ兵士を拘束する可能性もあると警告した。これに対しタイの外務省は、カンボジアが武力を行使した場合、「タイは自衛権を行使しなければならないだろう」と強く反発、緊張は一気に強まった。

2008年10月14日、寺院周辺に展開している両軍の撤退について、政府間の応酬が続いた。カンボジア側は、両軍司令官が協議した後の14日朝、タイ軍が同地帯から撤退を開始したと発表した。しかし、タイのソムポン・アモンウィワット（Sompong Amornviwat）外相は直後に記者団に対し「その予定もない」と述べ、「紛争地域には20-30年駐留している。80人の兵士らは地雷撤去作業部隊。越境はしていない」と自国軍の撤退を否定した。8月に両軍が駐留軍規模削減で合意したにもかかわらず、同国境地帯をめぐる両国の緊張は、最大1000人の兵士が6週間にらみ合う状態まで発展した。



2008年10月15日、両国間の対立が激化し、同国境地帯で両軍間の銃撃戦となり、カンボジア兵2人が死亡、タイ兵7人が負傷した。銃撃戦は午後2時20分ごろ、プレアビヒア寺院から数キロしか離れていない国境地帯の多数の場所で起きた。タイ軍報道官によると、銃撃戦は2時間以上にわたって散発的に続いた。カンボジア軍は現地のAFP記者に対し、「タイ軍がわれわれの領地に進入した。激しい銃撃戦だった」と語り、最初に発砲したのはタイ側だったと非難した。これに対し、タイのソムポン外相は、「タイ側が衝突の引き金を引いたのではないと確実に言える。われわれは依然としてソムチャイ・ウォンサワット (Somchai Wongsawat) 首相の方針に従っている」と主張し、首相が平和的な対話に向け努力していくと発表したことについて言及し、「状況が制御不能になるようなことはない」と確信している」と述べた。

2008年10月16日、タイとカンボジア両国の軍司令官は協議を行い、タイ軍高官は、この地域で共同パトロールを行うことで合意したと明らかにした。しかし、膠着状態の終結や国境地帯からの撤退に関して踏み込んだ議論はなされず、両軍は現状の配備を続けることで合意したという。また同司令官は、タイ軍が国境沿いに配備した兵器を引き揚げる予定はないと語った。21日には軍幹部による協議がカンボジアのシエムレアプ (Siem Reap) で再開される見込みだが、同司令官は「タイ側は約束を守っているが、カンボジア側がそれを破れば再び交戦となるだろう」と述べ、さらなる戦闘の可能性も警告した。一方、同地域に駐留するカンボジア軍の司令官は、協議の結果について「発砲しないこと、両部隊とも配備を続けることで合意した」と語った。

また、タイ軍は国境に近いシーサケット県南部プムチョロル村で兵力を増強した。銃撃現場から北に約9キロ・メートル離れた同村の検問所には、装甲車や軍用トラックが次々と国境を目指して集まっていた。軍の説明では、7月の紛争再燃後では最多となる兵士約1500人が国境に配備され、後方に援軍の陸、空軍部隊が待機しているという。軍幹部は「銃撃戦はいつ再開されてもおかしくない」と述べた。一方、カンボジア側の国境に入ったAFP通信員によると、両国軍兵士はわずか10メートルの距離で銃を向け合っており、兵士らは「タイはなぜ我々の領土を奪おうとするのか」と怒りを募らせていたという。その後、タイ、カンボジア両国は、「相手の領土侵犯が原因」と互いに非難しあう姿

勢を変えなかった。緊急協議を終えたタイ陸軍のウィブーンサク司令官は同村で「進展はない」と述べた。カンボジア軍幹部も「タイが提案した国境の合同パトロールなど受けられない。タイ軍に対抗して国境に増援する」と語った。2008年10月17日、カンボジアのフン・セン首相は閣議後、記者団に対し同国の最優先課題として防衛力の向上に取り組むと語った。一方で、世界遺産「プレアビヒア寺院」遺跡周辺の領有権をめぐるタイとカンボジア両国軍が対峙している問題については、最善の解決策は対話だと述べ、タイと戦争になるような事態はありえないと強調した。

カンボジアは、国連安全保障理事会に領有権問題の調停を求めているが、フン・セン首相は「タイ・カンボジア両国は、現在の枠組み内で対話を再開することで合意している」と述べ、第三者による調停の可能性を否定した。

両国は銃撃戦の再発を防ぐため、周辺地域で合同パトロールを実施することで合意したが、パトロール開始の時期は決まっていない。カンボジア軍のケ・キム・ヤン（Keo Kim Yean）司令官も、「国境が画定していない状況で、どこで合同パトロールを行うのか。当面は両軍を引き離しておくしかない」と述べ、パトロールの実効性に疑問を呈した。

そして、タイとカンボジアの軍隊の睨み合いは、2008年11月現在も続いている。

このように、タイとカンボジアの主張はかなり食い違っている。特に、対立が本格化した2008年7月15日当時、タイは、国内においてソムチャイ首相に対する反政府市民団体である「民主市民連合」が、現政権への非難を盛んに行っていた時期であり、カンボジアとの国境紛争に安易に妥協して国内の非難を浴びることはできないという事情があった。他方、カンボジアは、国内においてフンセン首相率いる「カンボジア人民党」が、2008年7月に実施される下院選で勝利できるか重大な時期であり、こちらもタイとの国境紛争に安易に妥協して選挙に敗北できないという事情があった。そのため、お互いに引くことができず、紛争を長引かせてしまうことになった。

また、その後、話し合いにより対峙する兵の数が十数名まで減少していたにもかかわらず、銃撃戦で死者、負傷者を出してしまい、タイ、カンボジア両国が、「相手の領土侵犯が原因」と非難しあう状況では、妥協点を見出すことは非

常に困難になってしまった。

ちなみに、タイは、陸・海・空軍合わせて 30 万人を超える兵力を保有する。それに対し、カンボジアの兵力は、兵士の人数と錬度、兵器の性能などにおいてタイ国軍にはるかに劣っている。今回のプレアビヒア寺院周辺で 2008 年 10 月 15 日に起きた銃撃戦の際、カンボジア兵が使用した冷戦時代の銃は弾丸が発射されなかったものも多かったという。

タイとカンボジアを比較した場合、タイは経済大国であると同時に、軍事大国でもあるという現実がある。

### 3 結論

本論文では、1 章において、タイの民族と言語を概観し、タイにおいては、標準タイ語、地域言語、周地的地域言語、その他の言語という 4 階層からなる言語階層が存在することを述べた。そして、タイ東北部に約 110 万人が居住する北クメール人の母語である北クメール語が、言語階層の中で、周地的地域言語に位置付けられていること、ブリラム県においては、スモーリーが推定したほど、タイクラン語が北クメール語使用地域に浸透していないことを明らかにした。

また、タイにおいて、言語階層上位の言語である標準タイ語を母語とするタイ人は、言語階層が相対的に下位の言語である北クメール語をまったく理解することができないと答え、他方、言語階層下位の言語である北クメール語を母語とする北クメール人は、言語階層が相対的に上位の言語である標準タイ語を理解することができると答えたこと、同様の関係が標準タイ語とラオ語の間にも現れることから、タイにおいて、言語の相互理解度は、タイ国内における言語階層の位置の違いに拠ると考えられることを示した。

そして、タイにおいては、タイ人こそが主流民族であるという優越感や、タイ人のクメール人に対する蔑視感情が存在し、それが国内においては、言語の相互理解度の違いに現れ、国外においては、「アンコールワット騒動」や国境紛争に結びついたことを示した。

2章では、タイとカンボジアの国境紛争そのものに焦点を当て、プレアビヒア寺院の歴史と、寺院が建立されている遺跡の帰属をめぐり 1962年に争われた国際司法裁判所への提訴の結果について示した。また、2008年にカンボジアが申請した、世界遺産登録をめぐり、同年7月から継続している国境紛争について、時間を追ってその概略を示し、7月当時、両国が安易な妥協をすることができなかった理由、妥協点を見出すことの困難さを述べた。

実は、タイとラオス間でも、1984年、タイ・ラオス国境線上の3村の領有を巡って両国間で衝突があり、1987年から88年にかけて起った両国間の国境紛争では、700名の死者が出たという本格的な武力衝突が起こっている。紛争は、タイ北部のピサヌローク (Phitsanulok) 県とルーイ (Loei) 県が、ラオスのサイヤブuri (Sayabouri) 県と国境を接するところで、1370高地、1428高地、1148高地などを含む約70平方キロの山間地で発生した。この地域も、1907年にタイとフランスが締結した条約で国境が確定したことになっているが、タイとラオス双方が領有権を主張していた。

タイ空軍の戦闘機まで参加し、激化の一途をたどった戦闘であったが、1988年2月12日、ラオスのカイソン・ポムビハン (Kaison Phomvihanh) 首相が停戦呼びかけ交渉を行い、タイのプレム・ティンスラノン (Prem Tinsulanon) 首相がこれに応じた。

これにより、ラオス軍事代表団が1988年2月16日にバンコク入りし、両国軍首脳協議が行われた。そして、1988年2月17日に、1988年2月19日午前8時を期して停戦すること、停戦発効後48時間以内に兵力をそれぞれ3km後退させることで合意し、1988年2月20日には両軍が撤退した。このように、タイは、第3国の仲介を借りずにラオスとの和平を達成した経験がある。ただし、国境画定問題を話し合う政府間交渉は、1988年3月に相次いで開催されたが、進展がみられぬままではあった。

今後、タイとカンボジアの国境紛争を終結させるためには、タイ、カンボジアいずれかの首脳が本格的停戦呼びかけ交渉を行い、他方がこれに応じて、停戦、兵力後退、和平へと導くシナリオが考えられる。例え、国境画定問題を話し合う政府間交渉が進展しなくとも、両軍が睨み合わなければ、今回のような偶発的な戦闘は発生しない。早急な本格的停戦呼びかけ交渉が期待される。

## 注

- 1 ラオ語は、ラオスではラオ語、タイ国内ではイサン語という呼称が使われることが多い。本論文では、イサン語ではなく、ラオ語という呼称を使用する。(山下 1999: 75-85)。
- 2 タイ東北部の3県とは、ブリラム (Biram) 県、スリン (Surin) 県、シーサケット (Sisaket) 県を指す。この3県は、ダンレック山脈を分水嶺を境界として、現在のカンボジアと接している。
- 3 1904年当時、タイの国名はシャムであったため、フランス＝シャム合同国境画定委員会という呼称が用いられた。
- 4 AFP 通信の、プレアビヒア寺院に関する記事は、すべて <http://www.afpbb.com/> という URL から検索を行った。
- 5 ウボンラチャタニ県は、プレアビヒアに接しているシーサケット県の隣の県であり、ウボンラチャタニ空軍基地は、ベトナム戦争において、アメリカ軍がベトナムへの爆撃機を発進させた基地である。

## 引用文献

- Aymoniers, Etienne (1901), *Le Cambodge. II. Les Provinces Siamoises*, Paris, Ernest Leroux Editeur
- 波多野里望・松田幹夫 (1999) 『国際司法裁判所～判決と意見』、第1巻(1948 - 63年)、東京：国際書院
- 林 行夫 (1990) 「村落宗教の構造と変容」、口羽益生(編) (1990) 『ドンデン村の伝統構造とその変容』、東京：創文社、403-506
- 峰岸真琴 (1993) 「クメール人」、石井米雄他(編) (1993) 『タイの事典』、東京：同朋舎出版、103-104
- Smalley, William A. (1994), *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*, Chicago & London, University of Chicago Press
- シーサワット, チューン(野中耕一編訳) (1991) 『象と生きるスワイ族～スリンの象村』、Bangkok：燦々社

高橋美和 (2003) 「タイとカンボジア」、綾部恒雄(編) (2003) 『タイを知るための 60 章』、東京：明石書店、63-67

山下明博 (1998) 「タイにおけるラオの呼称とアイデンティティ」、『国際協力研究誌』、5(1)、75-85

山下明博 (2002) 「東北タイのコラート語に関する研究」、安田女子大学紀要 30、223-231

山下明博 (2003) 「東北タイにおける言語と帰属意識」、広島大学国際協力研究科博士論文

吉川利治 (1993) 「条約改正」、石井米雄他(編) (1993) 『タイの事典』、東京：同朋舎出版、158-160